

# 洋裁教育にみる服装と色彩の表現

## — 洋裁指導書『子供服の時代化』を中心に —

### Expression of the Costume and Color in Dressmaking Education -Focusing on the Dressmaking Text Book for Teachers “Kodomofuku no Jidai ka”-

井澤尚子 Shoko Isawa

東京家政学院大学

Tokyo Kasei Gakuin University

**Keywords** : 洋裁教育, 色彩, 配色, 対比,  
色彩感情

#### 1. はじめに

衣生活において、家庭裁縫が主流であった明治・大正期の高等女学校裁縫教科書は、和裁の内容が大部分を占め、洋裁内容はほんの一部にしかみられない。大正末期になると裁縫教科書に子ども服を教材とした洋裁内容が増え、洋裁教育の体系化がみられるようになった<sup>1)</sup>。また、大正期までの高等女学校裁縫教科書の洋裁内容に関しては、色彩の記述はみうけられない。

本研究はこれらの背景を踏まえ、昭和初期の洋裁指導書にみる服装と色彩の表現に着目し、文献の考察を目的とした。資料として、一般社会の女性、初等・中等教育裁縫科教師を対象に著された洋裁指導書『子供服の時代化』(成田順著、昭和7年)をとり上げた。

#### 2. 洋裁指導書『子供服の時代化』<sup>2)</sup>について

##### (1) 著者「成田順」について

著者の成田順は、明治20(1887)年京都に生まれ、京都府師範学校女子部を経て、明治43(1910)年3月東京女子高等師範学校を卒業している。以後、東京女子高等師範学校附属小学校、高等女学校、女子高等師範学校、お茶の水女子大学に奉職し、昭和29(1954)年3月に定年退職。その後は文化女子大学に勤務し、その間13年間は学長としての重責を担った。

成田は、文部省から家事裁縫研究のためイギリス留学を命ぜられ、大正15(1926)年から2年間渡英した。さらに昭和4(1929)年7月1日付で、東京女子師範学校教授兼任督学官となり、裁縫科教授要目の改正にも携わっている<sup>3)</sup>。

##### (2) 『子供服の時代化』について

『子供服の時代化』は、昭和7(1932)年2月11日に大成書院より発行された、B5判、洋綴、

488頁(ほかに附録33頁)の著書である。

当時、時代化され洋装となった子供服を学校教育、家庭教育にとり入れる心がまえと方法、また、文部省の中等教員の検定受験にも役立つことを考えて、内容の選び方、記述の方法、図解表現の方法などにも意を用いている<sup>4)</sup>。

『子供服の時代化』の「第二章」に色彩の内容が記載されている。目次を次に記す。

#### 第二章 参考資料

##### 第二 服装と色彩の配合

1. 色彩の配合
2. 色彩の対比
3. 色彩と感情
4. 衣服の色の選択

頁数は10頁である。

#### 3. 服装と色彩の配合

成田はこの時代(昭和初期)に、和装に於いても洋装に於いても、色彩の配合(配色)については、今後益々研究を要すべき問題であると考えている。「質素な服装でも配色上に注意すれば清楚優美なものとなりますが、美衣美服も配色上没常識のものは、ただ憎悪の念を増すばかりであります。」と著している。さらに、多くの人の研究の結果として、色彩の配合を参考として『子供服の時代化』に記載している。

##### (1) 色彩の配合

図1に「二色の配合の良否」を示す。これは、二色を同大に並べた配合の良否である。

「最良」であるのは、赤と青、橙と青、黄と紫、青と赤、青と橙、紫と黄。「良」であるのは、橙と緑、橙と紫、黄と青、緑と橙、青と黄、紫と橙。「不良」であるのは、赤と紫、橙と黄、橙と赤、黄と緑、黄と赤、黄と橙、緑と青、緑と黄、青と紫、青と緑、紫と青、紫と赤、があげられている。これについて、色彩感覚の差(色相差)の大なるものは快感、差の小なるものは一般に不良に感じ

るといっている。

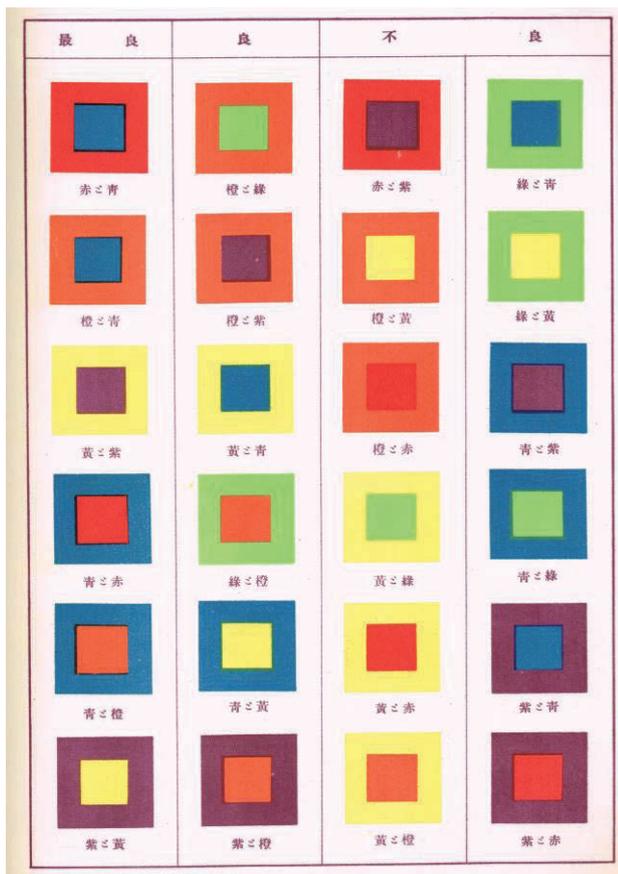


図1 二色の配合の良否

三色の配合では、紅・青・黄緑の三色、赤・青・黄の三色、赤紫・青緑・黄橙の三色、紫・青緑・黄の三色は良好である。

黄と白、紫と黒、中色と鼠のように、光度（明度）の接近した組み合わせはよくない。白・黒・鼠などがそれぞれ光度の差の大なる色彩と取り組めば、大概是良い配合となる。また不良の場合も、その状態に応じて白・黒・鼠のいずれかを中間に入れると、全体の配色は格段に良くなるといっている。

同色の配合も光度により（すなわち明暗により）、色度により（色の強弱により）色に対する感じが変わってくる。これは一般に上品な点が特徴であり、類の少ない配色であるといっている。

## (2) 色彩の対比

成田は、色彩に生命を与えるものは、色彩の対比現象にあると述べている。

①**光度上の対比** 白と黒の対比は、光度上の両極端にある。婦人の礼装である白衿、紋付の黒は、白によってますます黒く、白は黒によってますます白く見える。また同じ光度の鼠色でも、白地の

上と黒地の上とを比較すると、前者は著しく光度を増して白く、後者は光度を減じて黒く見える。白は単独に見た場合より、黒と比較した場合の方がはっきりと白く最大光度に見え、黒も同様に真の黒に見える。

②**同時対比** 二色を隣接しておくで、互いに相互の補色加わって鮮やかに見える。たとえば赤と青緑、橙と青、紫と緑も同様である。

③**継続対比** 甲の色をしばらく見たあと乙の色を見ると、乙の色は甲の色の補色を帯びて、元の色とはちがって見える。

実にこの対比現象は色彩の精華ともいべきで、これにより色彩の美はいつそう発揮される。それゆえ日々色彩を取扱う人はもちろん、日常生活においても、これら諸種の対比関係の基礎的知識を勉強し、色彩の選択に際しては正否を誤ることのないように注意すべきと述べている。

## 4. 色彩と感情

成田は、色は美を表すばかりでなく、感情も表すものであるといい、色彩感情にもふれている。たとえば、子供は主として赤から緑に至る積極的色彩を好み、年長者は緑から青を経て紫に至る消極的色彩を好むといっている。また男性は一般的に積極色を愛し、女性は消極色を愛する傾向がある。さらに、人によって感じ方はちがうが、一般的な色彩に対する感情の大体の傾向を、次のように挙げている。

- 赤 — 誠心、熱心、活気、愉快、焦燥、野蛮、幼稚な感、卑俗な感
- 橙 — 明るい華やかな感、少しの熱、嫉妬、嫌忌、疑惑、我儘
- 黄 — 明るい晴れやかな感、快活、猜疑、優柔、発展、希望
- 緑 — 明るいおちついた感、平和、親愛、公平、着実、成長
- 青 — おちついた静かな冷たい感、沈着、冷淡、神秘、陰鬱
- 紫 — おちついた静かな感、高貴、謹厳、優雅、温厚
- 白 — 活動、歓喜
- 黒 — 沈静、不安、悲哀

## 5. 衣服の色の選択

成田は、衣服の色の選択について次のように著している。

西洋人は髪の色と眼の色を基調として配色するが、日本人は顔の色を基にして選択するとよい。

子供服としては、一般的にうすいやわらかな感じと、明るい感じのする色、すなわち桃色、水色、クリームなどがよい。老年の婦人には、落ち着いた静かな、そして威厳を保つことのできる色、すなわち茶・鼠・青に近い緑など濃い色がよい。また、ふとった人にはほっそりと見せ得る黒味を帯びた色、黒味がかつた青・紫・緑などがよい。色が白く血色のよい晴れやかな顔の持ち主ならば白はよく似合う。

一般的に色の白い人にはどんな色でも大抵は似合うものであるが、われわれ黄色人種はこの点で苦心を要するのである。それゆえ私たちは、身だしなみとして薄化粧をして顔全体を引き立たせると、すなわち衣服と光度の対比効果から、好結果をもたらすことになるのである。

以上、ごく簡単に単純な色について述べたが、実際にはなかなか複雑である。わが国において一般に使用している衣料織物や染色術は非常に発達しており、色彩は複雑になっている。これを活かして用いることは、使用者が常に注意し心掛けなければならないことである。私どもは色合いや柄合いに注意して、常に高尚な趣味を養うと同時に、色の科学的な面も怠らず学ぶことが必要である。

なお常に自己の立場を考え、自己を忘れず、自己を基本として自分に似合う色の選択をすることが、衣服使用の目的・場所・時に合致する選択であるよう考えたいと結んでいる。

## 6. まとめ

『子供服の時代化』の“第二章 参考資料 第二 服装と色彩の配合”について、成田は「多くの人の研究の結果として」とのみ記し、色彩の配合を参考として著している。

後年、『続被服教育六十年の回顧』（成田順著、昭和50年）の中で、服装と色合いについて「この題目についての講演は、昭和のはじめ、今から五十年近くも前のものであるが、服装の研究には、色合いについての基礎がなければならないことを痛切に感じて一応まとめたものである・・・」<sup>5)</sup>と記している。なお、この著には“服装と色合い (一) (二) (三)”の口絵として図1 二色の配合の良否 (色彩表)、パリー発行のスタイルブックの写真、米国の印刷物の写真が掲載されており、

いずれも今から約五十年ほども前の資料であると記されている。

このように、昭和初期に外国の資料を著書に使用しているのは、成田がイギリス留学時に諸外国を見聞したことも一因であろうと考える。

二色配合 (配色) では、色彩感覚の差 (色相差) の大なるものは快感、差の小なるものは一般に不良に感じるといっている。これについて「最良」「良」であるとされるのは、中差色相、対照色相、補色色相の調和であることがわかる。

さらに、成田は「色彩に生命を与えるものは、色彩の対比現象にある。」と述べているように、色彩の対比や色彩と感情にもふれ、肌の色に合わせ顔全体を引き立たせる服装色の選択、服種の特性を考慮した色彩の選択を勧めている。

これらのことから、当時、洋装化が進む中で、成田順が目指した洋裁知識・技術の普及には、服装と色彩の表現も大切な要因になり得ていたと考える。

今後は『子供服の時代化』には記載のない、これら資料の裏付けとなる色彩理論について、さらに研究を進めていきたい。

## 【参考文献・引用文献】

- 1) 井澤尚子: 子ども服の洋装化と女学校被服教育, 日本女子大学大学院家政学研究科通信教育課程家政学専攻修士論文 (2015年3月)
- 2) 成田順: 子供服の時代化, 大成書院, (1932)
- 3) 成田順: 被服教育六十年の回顧, (1974), 61-86
- 4) 成田順: 被服教育六十年の回顧, (1974), 169-170
- 5) 成田順: 続被服教育六十年の回顧, (1975), 23
- 6) 日本色彩学会 編: 新編 色彩科学ハンドブック (第2版), 東京大学出版会, (1998)
- 7) 東京商工会議所 編: カラーコーディネーションの基礎 第3版 カラーコーディネーター検定試験 3級公式テキスト, 東京商工会議所, (2009)